たが、一九三三（昭和八）年七月二日の午後、富士裾野で耐熱、渇水演習をしていた歩兵第一聯隊（連隊長本間雅晴）の第二中隊は八六人中、突撃して残ったのは中隊長以下一三人だけで、聯隊で死者八人、重症一八人、軽症者六〇〇人の熱中症が発生した。自衛隊でも熱中症死が出ている。

高温職場で食塩補給が常識になったのは戦後のことである。

戦後、業務上疾病としての熱中症件数は一九六三年には三五〇件近くあったし、一九六四年に常磐炭鉱で一時に三人の熱中症死も発生した。

一九七〇年代になると、次第に熱中症の発生は減少してきた。

しかし、この減少には、炭鉱、鉱山の廃山によって高温の坑内で働く労働者の減少が影響している。また、製鉄所などではオートメーション化の進行が効果をあげている。

現在では職場より、スポーツの途中とか、高齢者への高温影響が問題である。

（労働科学研究所）

19 わが国における義歯の発達 概要

本山 佐太郎

歯牙の欠損に対して補綴を行うという発想は、洋の東西を問わず同じであったらしい。

わが国では、仏師・面打ちなど木彫技術に携わっている人が、身内や知人・縁者の極く限られた人達に、好意的に義歯を調製していたと思われる。

初めは歯に似通った色で細工のしやすい、葉ろう石(Pyrophyllite)や滑石(Talk)などを彫刻して、隣在健全歯にむすび、繋ぎとめていたようであった。——石製義歯。

次いで義歯に小孔をあけて、これに糸・はりがねを通して隣在健全歯に繋ぎとめて維持をはかる方法をとったのである。

使用材料にも工夫が見られ、牛などの動物の骨・歯を彫刻して作る骨製義歯から、世界にその比を見ないといわれている木床（木製）義歯へと、わが国が独自で開発し発達させていったことは確かなのである。

江戸時代になり義歯への要望も次第に多くなると、「はいしゃ」の看板を掲げて入歯師を名乗り、なりわいとして義歯を専門に製作する者が、誕生したのである。

これが初代小野玄入であり、以来幾多の入歯師が輩出したが、当初は高禄の武家や分限の商人ら、比較的収入の多い人々が対象であった為、要求も厳しく時には技術の開発は一命に関わることであった。

一方「火事と喧嘩は江戸の花」といわれるくらいに喧嘩が多く、怪我による前歯部の歯牙破折も数多くあったに違いない。年輩者ならいざ知らず、名を売る若い男伊達としては、前歯欠損はサマにならないし、どうにも我慢がならなかったことであろう。

これに答えるべく入歯師も前歯部の義歯製作に技を競った結果、歯科技術は急速に進歩したのである。

そして当時、既にほとんど完成されていたといわれる仏像彫刻の技法である差首・玉眼嵌入・アリ形の技法を、義歯製作技術に取り入れたのである。

更にむすび、繋ぐことから着脱可能なクラスプを応用した義歯を、製作するに至るまでの移り変わりと、その製作過程において架工義歯が創案され、継続歯が発明される手順など、先人達の創意工夫の跡を尋ねてみたい。

（東京医科歯科大学）